



マルセル・ティリー『時間への王手』における「灯台の三本の光」の表象

岩本, 和子

(Citation)

近代, 126:49-73

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481779>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481779>



マルセル・ティリー『時間への^{チェック}王手』における 「灯台の三本の光」の表象

岩 本 和 子

はじめに

ベルギー幻想文学の流れを汲む作家の一人、マルセル・ティリー (Marcel Thiry 1897-1977) の作品は、幻想性と共にリアリズム性、即ち現実に対する眼差しを併せ持つ。森は「〔……〕マルセル・ティリーの場合、幻想は能動的・計画的な意識の所産として現れる」と指摘する¹が、その幻想はさらに中篇小説「アンス・クールのための協奏曲 Le Concerto pour Anne Queur」(*Nouvelles du Grand Possible* 1960 所収) や、とりわけ代表作である長編小説『時間への^{チェック}王手 *Échec au Temps*』(1945) において、SFの夢想にも接近していく。

SFとは何か? 「〔……〕サイエンス・フィクションは、それ以前の非現実的物語を継承し、全く同じ機能を果たしている。かつての妖精物語は、いまだに支配しかねる自然を前にした人間の、素朴な願望を表現するものであった。〔……〕サイエンス・フィクションは、理論と技術の進歩に対して恐怖を覚えた時代の苦悩を反映しているのである。²」このような、幻想からSFへの移行の狭間にあると思われる作家の一人がM.ティリーである。J.B.バロニアンはまたこう指摘する。「SFは、今ある世界には興味を示さない。こうなるであろう世界、こうなるかもしれない世界、こうなることができるかもしれない世界、こうなるはずかもしれない世界に関心を抱く。³」

『時間への^{チェック}王手』は、1815年の〈ワーテルローの戦い〉が(我々の知る歴史とは異なる)ナポレオン率いるフランス軍の勝利に終わった、その120年後のベルギーを舞台とする。主人公である「私」が偶然出会ったイギリス人の天オ

物理学者ハーヴィーは、自分の曾祖父に当たる士官の手落ちがウェリントン將軍の敗北の直接の原因となったことを突きとめ、一種のタイムスリップによって6月18日の戦闘を眼前に再現（召喚）し、士官の行動をわずかに変化させて歴史を転換させる。「私」はそのタイムスリップの実験に巻き込まれ、ナポレオン軍が敗北した「別の世界」に投げ込まれるが、なぜか一人だけ「かつての世界」のことを記憶している。勝敗の逆転の結果命を落すことになった士官の子孫ハーヴィーも実験の痕跡も消滅し、元々存在しなかったものとなる。実験につき込んだ多額の支払の事実も消滅し、自身の会社も倒産し、不払いの罪でこの「別の世界」では罪人・精神異常者とされて「私」は独房にいる。その「私」の回想がテキストの枠となり、かつての世界の日常生活が、会社経営や株の失敗、同級生やハーヴィーとの出会いといった細部と共に描かれる。厳密な時間の計算と正確な歴史の再現、世界を変える理論の精密さ、新たな世界における細部の変化といった実証的・科学的知識が駆使され、「時間」や「因果関係」の概念についての議論も戦わされるのである⁴。

本稿では、短篇「劇中劇 La Pièce dans la pièce⁵」に続き M. ティリーの二作目の邦訳となる予定の『時間への王手⁶』を紹介しつつ、筆者が特に気になっているオステンドの灯台の三本の光の描写に注目してみたい。灯台のあるオステンドはじめ、舞台として選ばれたベルギー各都市の象徴を通して、このテキストにおける「ベルギー」という表象について考察する。

I 「オステンド」

『時間への王手』の物語の主要舞台はベルギーの北端、海辺のリゾート都市オステンドである。「現在」独房にいる「私」の一人称語りで「牢獄から語る話はお好きだろうか。『カルメン』以来、囚人の物語は一文学ジャンルになった感がある」(p.21)と読者への呼びかけで始まる。その回想としての物語は次のように始まる。「私の名前はギュスターヴ・ディウジュ、35歳だ。私の破産

を宣言した判決文によると「ナミュールの元鉄鉱卸売業者」である。物語はシャルルロワで始まる。6か月前かそこらの1935年4月末、ある月曜日の午後のことだった」(p.27)いつものように取引の仕事を終え、ナミュールの「小塔付きの館」に帰宅する代わりに、突然別方向の北に向かうオステンド行き急行列車に乗り込む。途中のブリュッセルでも引き返すことをせず、そのまま海辺の街に降り立ち、そこで運命の出会いと「大事件」に巻き込まれていくのである。

I-1 オステンドの灯台が放つ三本の光

このオステンドの描写において繰り返し現れるのが、港の灯台から発して回り続ける「三本の光」の筋である。数えてみると12回。光線の回転しながらテキスト内でも時を刻むように唐突に挿入される短い描写に、意味のないはずはない。先行研究や作品解説ではこの光に関する詳しい考察は見当たらないようだが、ここで該当箇所を拾い上げつつ、その意味を考えてみたい。

灯台から筆で引かれた白い三本の線が、半円の夜空を規則正しく通過していた。それらが私の散漫な思考に拍子をつけてくれ、私はかなりゆっくりとだがそれらをまとめて、行動を決めようとしていた。(p.48)

灯台は、平然と、その三本の駿足の束を海上に延ばしていた。鋼鉄棒も、手数料抜き価格も、不良債権も、税の申告も、はるか遠くのことに思われた。(p.49)

灯台が運命の巨大な車輪のように永久に回り続けるのを私は思い描いていた。夜の列車にもう一度乗るなど、もはや問題外だった。(p.56)

三本の光が「私」の行動を導き、別の道へと誘い、そして「私」の日常とは違

う「異世界」への扉を開けてその中に抱き込んでいく役を果たしているようである。抱き込まれたこの街は、次のように光に守られた心地の良い穏やかな世界である。

〔海岸のこのあたりは〕灯台が風車のように回って突堤や街や沖に向かって投げかける、あの光の腕に守られている。夜の冷気に包まれた、心地よい散策が期待された。(p.50)

〔……〕そして私は知っていた。灯台の三本の光がどんなリズムで優しく触れてくれているか。それが見えない光の拍動となって私たちの頭上を絶えず通過し、雨と海の外れで、少々酔っぱらったこのたわごとのコンサートを編成してくれていた。(p.59)

私たちのまわりでは、灯台の三本の光線の規則正しいリズムに合わせて、閑散としたカフェの、地味だが魅力的な部屋全体がぐるぐる回っていた。(p.69)

三本の光線は、心地よくその腕に抱いてくれつつ、実は「私たち」の思考や行動に影響を及ぼす力を持つことも改めて示唆される。それは、オステンドという「異世界」に入り込んだ者たちを監視し支配する、そこから逃れられなくする力でもあるかのようだ。

しかしながら、夜の9時、私はアクシダンと突堤を散歩していた。灯台の光の筋がゆっくりと静かに回っている下で。(p.87)

彼〔アクシダン〕は驚いて、一瞬立ち止まった。私たちは突堤の端の、柵

のすぐそばまで来ていた。回れ右をした。光の長い線が私たちの前に伸びていた。もっと遠く、ミッデルケルケとウエステンデのあたりには、別の光の点線が闇の中で柔らかに瞬き、海辺の大通りを縁取っていた。(pp.90-91)

彼〔アクシダン〕は肩をすくめた。怒ってはいなかった。私の腕は放さず、そのまま闇の中を急ぎ足で引っ張って行った。私たちはまたUターンして、もう一度灯台の回転する三本の光の方へ戻って行った。(p.96)

三本の光線は、異世界に迷い込んだ「私」とその仲間、つまり再会したかつての同級生のアクシダンと、イギリス人物理学者のレスリー・ハーヴィーだけでなく、この街にいる人々の上にその触手を伸ばしているさまが描写される。ただし、テキスト後半では灯台への言及はなぜか完全に消え去ることとなる。次の二つの引用はテキスト半ばの、灯台の光の最後の描写である。

そして相変わらず天体のような規則性をもって、灯台のあの三本の光線は一つずつ頭上を通り、大きく拡がって海上の闇の中に消えて行った……〔……〕 彼ら〔ベンチの上で抱き合う恋人たち〕の上には、祝福を与える灯台の大きな腕が回りながら伸びていた。(p.142)

聞こえるのは、闇の中を突堤の傾斜面沿いに上ってくる心地よい波音、すれ違った少女たちの笑い声、そして頭上を平然とゆっくり旋回する灯台の三つの閃光。(p.146)

テキスト上では後戻りすることになるが、「語り手」の「現在」の時間において、光がこの「場」にいる「特定の人類」を覆っていることがすでに記述されている。

つまり、「現在」の「私」、すなわち独房にいるディウジュは「光」による支配をはっきりと意識しているのだとわかる。

[……] 今でも突堤の端、灯台からそう遠くないところにあるこのカフェを、みなさんも確認できるだろう。灯台は今でも水路の反対側で超然と三つの光の翼を、それが覆うオステンドの家々の屋根や特定の人類の上に伸ばしている。(p.51)

光がオステンドという場、そしてそこにいる、あるいはやって来た人々を覆い、支配していると明示されているのである。

光の重要性は、時には灯台以外から発せられた光によっても表される。それについてもオステンドの土地との一体化が見られるであろう。

彼〔アクシダン〕は私の手をとった。それから、人気のない突堤上で、閉ざされ押し黙った大ホテル群の列を前にして、以下の話を私はあっけにとられながら聞いた。その間、背の高い街灯によって、速足で歩く足元で私たちの影が伸びたり縮んだりし、見えない海の音に合わせていた。(p.91)

光の支配や時間への意識を灯台の三本の光が象徴するとすれば、この物語にとっての「オステンド」は、ベルギーではごく限られた海沿いの港町として必然的に選ばれた、象徴的な場所であるのは間違いないだろう。

I-2 象徴としての「オステンド」

選ばれた都市オステンドは、ベルギー人にとって、あるステレオタイプ化されたイメージを喚起する場でもある。それが『時間への王手』においてはさら

に一つの象徴として利用されているようだ。まずはテキストからその手掛かりを拾い上げていこう。シャルルロワで「私」はなぜか突然、破産の危機に瀕している自分の会社や日常生活から逸脱し、いつもの習慣をわずかに変えた瞬間から「自由」の観念にとらわれ始めたことに気づく。

なんともつつましい自由だ！ 一時間ぶらつくだけの野望だなんて！
〔……〕この歩道に私が踏み出した最初の一步は、やがて独り立ちしていく自由をこの世に送り出したのだ」(p.34)

それをきっかけに、やがて運命の分岐点となる、列車の行き先変更へと至るのである。

〔……〕5時35分、プラットホームの反対側の線で、オステンド行き of 急行だ。海の方へ向かっていくそちらの線路を見つめた。ナミュール行きの列車がしゅっしゅと音を立てている線路と、平行に伸びている。この二本の鋼鉄の道は、互いに等しく、互いに無関心であった。そのどちらかを私には選ぶ権利があるという心地よい印象にとらわれていた。それまで考えたこともなかった。いつものように小塔の館へ戻り、家政婦が仕切っている孤独な夕食をとるこの時刻に、あろうことか海辺へ向かう列車に乗るなんて…… 新しい生、自由な生がみなぎっていた。駅のプラットホームが、雨を吹き払い雲や霧を散らす一陣の風の中で、突然波止場の匂いを放った。(p.38)

そして、この逃避の中で、「自由」をはっきりと自覚する。

ブラバント地方の平原の起伏を抜けていく列車での逃走が、なぜだかもっ

と楽しく思えた。まるで、すでに親しみを感じていた不可視の存在が車室に戻ってきたかのようにだった。——自由という存在だ。(p.43)

オステンド行き列車とは、「自由」への道なのだ。

私の方は身軽で荷物もなく、大海原に向って大きく開かれたこの海辺の駅の明るいホームに降り立った。〔……〕突堤の方へ行った。人はいなかった。日が暮れようとしていた。長い雲の広がる夕べで、雲は暗い海の水平線に消えかかる緑の筋を残していた。(p.47)

大海原の、広い世界へとつながる「明るい」街そのものが、「自由」の象徴なのだ。ここで起こる出来事が「私」にとっても「自由」や「解放」の道に他ならないであろう。それは空間だけでなく、時間つまり原因と結果からの解放へと導くものにもなっていくであろう。

〔……〕あの三杯目のウイスキーとアクシダンの半ば常軌を逸した話とで、心地よく酔っていた。そこに安心と解放の不思議な印象も混ざり込んでいた。結果という概念いっさいから、つまり責任や心配いっさいから解放してくれる、この夢物語を聴いていた。(pp.64-65)

初めは常識人・商売人として懐疑的だった「私」も次第に場の磁力によって時間からの「自由」という概念に惹かれていくことになる。Ch.ベルタンはオステンドを「あらゆる可能性の中継点＝ターンテーブル plaque tournante」の象徴だと指摘する。「オステンドはマルセル・ティリーの作品において、人が可能なるもの le possible の様々な道を取ることのできる場所として現れる。もし逃避がどこかで実現できるなら、もし自由が詩人たちにとっての詩句以外

のものであり、もし諸結果と諸原因の呑むべくもない織物を愛が引き裂くことができる場所があるとするなら、それはここだ。ギュスターヴ・ディウジュの失踪が導き、ハーヴィーが過去を変えることを夢見、アクシダンが秩序を覆す詩の効果を生徒たちに教え込むのがオステンドであることは、偶然ではない。^{7]}ベルタンはさらに、ティリーの他の作品 *Nondum Jam non* においても、夢の実現や人生の幸福の頂点に行きつく場としてオステンドが選ばれていることを追記している。

実はベルギーのフランス語文学において、オステンドは「自由」「解放」のイメージと共に多くの作家によって描かれてきた。ティリーはそのステレオタイプに従っただけなのかもしれない。特に首都ブリュッセルに住むベルギー人にとって、オステンドはまずはヴァカンスで過ごすリゾート地であり遠出の旅の目的地である。ティリーやジェラルド・プレヴォの作品で描かれるようにブリュッセルからの列車の終着駅であり、目前に広がる海からは何かしら呼び声がする気がする。しかも僅か数時間でこの「地の果て」に到着し、あっという間に「日常」から離れられる。ここは、プレヴォにおいては一息つく休息地となる。ゲルドロードは駅と海の近さにいつも惹かれていて、いつか列車がそのまま大海原へ飛び出して水平線へと進み続けることを夢見ていたという⁸。彼の中篇小説『魔術 *Sortilèges*』でも、ブリュッセルから北に向かう列車とオステンドでのカーニバルを背景に、この夢が描かれている。F. エレンスもよくオステンドに行くたびに何かが始まる喜びを感じていたという⁹。

『時間への王手』に戻ろう。「私」が滞在するホテルの部屋もこの自由な別世界、新たな運命への入り口としての場となっている。「私」が偶然出会った二人の「途轍もない話」を聴きながらウィスキーで酩酊した夜、ハーヴィーが自分と同じホテルに部屋を取ってくれた。それは煉瓦の絶壁に囲まれた高所であり、海に向かった空中の城、いわば異世界空間である。持ち物は昼に買った歯ブラシだけ。オステンドは「私」にとっては財産剥奪、つまりいっさいの所有物から解

放された場となる。ここで「私」が身に纏うバスローブさえ次のように「自由」の象徴と感じられるのである。

このありきたりの服の、真っ白で粗いコットン生地の清潔さと、とくにそれが地味な粗布で万人向きの感じのおかげで、とても助かった。私が持てる者の時代を通り過ぎ、全財産喪失の段階に進む手助けをしてくれる気がしたのだ。私はかなり高いところから海を見ていた。5階か6階くらいのもようだった。〔……〕ありふれた肘掛椅子に身を沈め、ホテルの全滞在者と同じ苦行僧衣のようにごまごわした清潔なタオル地に体を包み、私はこの高所でゆったりと漂っていた。(p.60)

「白」という色もやはり「非所有」の、そしてあらゆる可能性に向けての出発点の象徴となっている。ただ、このホテルの部屋の内部は閉ざされた空間でもある。上記引用に「苦行僧」の比喩があったが、それは修道院の個室、独房を連想させ、ひいては「現在」の「私」のいる監獄の独房にも連結するものではないか？ そこは物理的には閉ざされているが精神的には自由な空間である。しかし「私」の滞在するホテルの部屋の中にはさらに別の「空間」が存在する。小机の引出しで、ここに未開封のまま何通もの手紙が積まれている。それらは「かつての日常」のディウジュ宛であり、日常の場であったナミュールの侵入を象徴する空間である。オステンドとは別の都市、別の空間について次に見ていくことにしよう。

II ベルギーの他の都市／場

『時間への王手』においては、ベルギーに実在する諸都市や土地といった「場」とそのイメージが重要な意味を持つことが、オステンドの表象からも推察できる。そこで本章では物語に係る他の場所の表象について、オステンドと対比さ

せつつ見て行きたい。登場するのはナミュール、シャルルロワ、ブリュッセル、そしてワートルローである。

まずナミュール Namur に注目しよう。明らかにオステンドに對置され、自由に対する「束縛」、バカンスのためのリゾート地に対する「仕事」、夢と冒険に対する「現実の場」として呈示されている。物語の舞台となった1935年頃は、南部ワロニー地方の鉄鉱・炭鉱山を有して重工業・商業・産業で栄えたベルギーの中心都市のひとつだった。テキスト内ではこの街で育った「私」が次のように描かれる。それは典型的な小ブルジョワ階級の生活である。

私はなんとなく商売人になった。父と祖父がそうだったのだ。〔……〕ナミュール近郊にあるオフィスの看板は従って〔父が亡くなると〕ファーストネームを換えるだけでよかった。私は郊外の丘の上に小塔付きの小さな城を持っていた。母が亡くなってから長年、父と二人きりで住んでいた所だ。それを改装するのに相当の額を払った。

ところが私がトップに就いた瞬間から会社は明らかに着実に傾き始めた。〔……〕父と同じように、毎週月曜日はシャルルロワ、水曜日はブリュッセルに行き、毎月一回製鋼所を巡回していた。(pp.15-16)

私には妻も子も家族もなかった。私の習慣、つまり新作展示会の時期に二年ごとに購入する車、友人たちの小塔付き別荘での狩猟、齢を重ね毎年棚を増やすたびに愛着を増してきた書庫、そのどれもがそのうち全くどうでもよくなるはずだとは、たぶん当時は考えてもいなかった。(p.17)

オステンドに向かう列車の中で、「私」はナミュールとオステンドとの二つの行き先の間で逡巡する「二人のディウジュ」の存在を感じる。その分身たちはこれ以後、内面で戦い続けることになる。〈ワートルローの戦い〉の当日、

つまり過去再現実験の最終日に至ってもその葛藤が続くのである。

〔ハーヴィーに向って〕「悪い運の方が出てきたら？ 次の6月18日の夜に、1815年6月18日と何の通信もできなかつたらどうするのか、決めてるのですか？」

話していたのはギュスターヴ・ディウジュだった。驚くことはないだろう。しかもナミュール特有の訛りと商売人の口調で、どこかしら債権者の口調も混ぜて話していた。(p.166)

〔6月18日に〕私は軽い興奮とともに実験室に向っていた。それは少年のころ賞の授与式の朝に味わった感情を思い起こさせた。ただし、二人の人物となってそこを目指していた。

ナミュール人のギュスターヴ・ディウジュが、とても好奇心をそそる最終日に至ったものだから、一晩のうちに生気を取り戻して、オステンドのギュスターヴ・ディウジュと肩を並べるまでになったのだ。そこで僕らは二人して、軒を連ねる魚屋の前を通っていた。〔……〕二人のうちの一人、自覚し今の自分だと思っている方は、ハーヴィーとアクシダンの仲間で、新たな自由の征服者だった。〔……〕気づいていない方のもう一人のディウジュが、一人目の方の純然たる不安の下で、ひそかにこんな無茶がこの日に終わるのを待っていた。そいつは芝居の結末をはっきり知っている観客として、落ち着いて楽しみながら見物していたのだ。彼にはわかっていた。この長い、ドン・キホーテなみの向こう見ずな冒険が失敗すれば、それを境にまともな生活が始まるのだと。(pp.184-185)

ただしこの「二人のディウジュ」の存在を明確に意識し、それらが交互に現れて自分の行動を決めているのだと理解し冷静に分析するのは、「現在」の「私」

である。なぜ自分だけが、〈ワーテルロー〉で歴史が変更された前後の「二つの」パラレルワールドを知っているのか、なぜ以前の、そして「存在したことのなかった」ハーヴィーを覚えているのか、を探求する中で、自分の中にどっちつかずの「二つの」自我が存在していたことを認識した上でのことであった。

この恐ろしい理屈全部をサンチョ・パンサのディウジュ、つまりナミュールのディウジュが、熱に浮かされたドン・キホーテのディウジュを連れて、おぼろげな光に沈む親しいオステンドを歩きながら、ひとつひとつこれほど明晰に論じたのではもちろんない。これらの考えは私自身の奥底に潜在的に残っていたもので、いわば思考されたものではなかった。精神状態の基底となっていて、その時は気づいていなかったが、今はよく理解できる。何より安全のためだったのだ。(p.186)

ナミュールとオステンドは、「私」の存在の謎、可能な多くの世界の「並存」についての謎解きの、ある意味での鍵を与えてくれる、「現実」世界での具体的な2つの場を象徴しているのではないか。

次に、シャルルロワに目を向けよう。ナミュールに付随する、同じワロニー地方の商業都市であり、毎週「私」がその証券取引所に通う場所である。今でも人口はベルギーで第4番目の工業都市だが、かつての炭鉱閉山により、衰退し失業者の多い街でもある。テキスト内ではこれらの特徴を象徴するかのよう

に、次のように描かれている。

陰気な土地という詩情がシャルルロワには纏わりついている。それはあたかも石炭鉱山のすべてから、炭鉱が吐き出すあの黒くて煤けた水の流れる川となって、労働者たちの住む街に降りてきたかのようだ。それは、ブルジョワ地区では坂になった歩道の青い敷石上を滑って濾過され、薄めら

れた沼となって狭いヴェル＝バスに拡がっていく。ここでは高級店や、革製やマホガニーの高級家具を備えた酒場があり、元々のとげとげしさはほぼなくなる。とは言え高所での炭鉱労働者たちの苦難は白い街々の重い空気の中にそれでも溶け込んでいる。ベルギー人の清潔志向で敷石や建物の外壁を何度も何度も洗い、ブラシを擦る音、鬨にバケツがカンカン当たる音や流水の音が絶えずするので、シャルルロワ訛りの苦情が絶えることがない。石炭がお金に変異するこの地方はマクベス夫人のようなものだ。産業という罪に咎められたその両手を清めることは、永久にできないのである。〔……〕その街で、毎週月曜日、私は商売人たちの証券取引所に通っていた。(pp.14-15)

首都ブリュッセルは、ベルギー各地からの鉄道網の最大集結地点でもある。このテキスト内では、南のナミュール、北のオステンドを結ぶ途上の、方向転換の可能な中継地点であったが、「私」はそのままここを通過する。ドウ・ノラはこう指摘する。「ディウジュの選択——住居と仕事に戻る列車でなく、海辺のリゾート都市への列車に乗ること——は、弱さではなく、日常の軌を断ち切る意志によるものだった。¹⁰」

そして、オステンドのハーヴィーの下宿の七階で繰り返される、1815年6月18日のワテルローの「過去再現」。〈ワテルロー〉は、ナポレオン帝国崩壊、連合国軍の勝利、そののち列強首脳によるウィーン会議で今日につながるヨーロッパ各国の国境線が引かれることになる、まさに天下分け目の戦いの場であった。1815年6月18日がその決戦の一日だった。ハーヴィーは、宇宙空間に放たれた過去の光景を映す光を、高価な金属（＝プラチナのことで、その資金の「出資者」を「私」が引き受けて実験に巻き込まれていく）を用いた磁化によってその軌道を曲げ、複雑な計算によって「現在」即ち1935年のオステンドの下宿の一室に回帰させる。「磁化が投光器の光のように戦場の光景上

をゆっくりと移動し、そしてこの場所を我々の目の前に映し出したのだった」
(pp.91-92)

このときの世界のワーテルローでは、人工の丘の頂上に立つ記念像の鷲がナポレオンの勝利を象徴していた。「私」がオステンドへ向かう列車の描写で、まずそのことが示される。

〔乗り合わせたフランス人家族の〕紫色の勲章を付けた紳士が、列車がワーテルローを通過すると告げて、妻と息子に有名な戦場についての簡単な歴史を話していた。記念碑の丘が見えたとき、彼らは3人とも様々な感嘆の声を上げて敬意を表した。他にすることもなかったので、私も彼らのように窓から、夕暮れの空にくっきりと浮かぶその建造物を見た。丘の黒っぽい三角形、その上に大きく広げた翼、偉大なる勝利の鷲がそそり立っていた。(p.28)

フランスの勝利から敗北へと「歴史」が塗り替えられるとき、戦場となったベルギーはどうなるのだろうか。1815年当時、ベルギーという国はまだ存在せず、一帯はフランス帝国の一部、そしてウィーン会議によって、(現在の)オランダと共に「ネーデルラント連合王国」を形成したところだった。『時間への王手』では、その15年後の「ベルギー王国」誕生には、それに先立つヨーロッパ諸国間の諸条約締結や諸変動の微妙なバランスによって、ワーテルローの勝敗の逆転は関係しなかったとされる。人々の日常生活も細部を除いて、(おそらくハーヴィーの曾祖父はじめ、この戦いに生命の存続がかかった兵士たちの子孫の存在以外は)影響を受けなかったのだ。

私には、4カ月前のとんでもない事件までは、ワーテルローとはフランスの勝利であり、ナポレオンの戦勝の中でも最も華々しいものだった。パ

りでは、ベルギーから到着する駅はワートルロー駅という名前だった。その代わりにロンドンでみなさんがウォータールー駅と呼んでおられる駅は、ありふれた分岐点ということで、セントジョージという名前だった。ミシェル・ネーの子孫たちはエルシンゲンとモスコヴァの称号にさらにワートルローとオステンドを加えていた。また、シャルルロワからブリュッセルに至る道の左手、オアンのくぼんだ道のあたりで、記念の円丘上に聳えるのは、勝利の翼を広げた鷲だった。(p.30)

変化は可視化された象徴的な諸事物や名称で表されるのみである。このような物語の展開には、幻想小説的な性質も垣間見られよう。

実際にワートルローの戦いでは、(未来の)ベルギー人たちは双方の軍隊に参加していて、それ以前の戦争では仲間だった者たちが今回は敵味方に分かれた場合もあったという¹¹。現在ワートルローの戦場跡には様々なモニュメントが残されているが、100周年記念に建てられた「ベルギー人の碑」には、「1815年、2つの陣営のベルギー人兵士の記念に」と記されている¹²。2つの陣営に分かれた「ベルギー人」たち。ここで問題になるのが、ベルギーにおける民族・言語の多様性という特殊状況である。『時間への王手』で「私」はナミュール人つまりワロン人で、民族的・精神的にフランス側にくみし、またアクシダンの曾祖父もワートルローではフランス軍の伍長だったことが明かされる。それなのになぜハーヴィーの曾祖父だった大尉の「歴史的失策」を覆してイギリスを勝利に導く実験に協力するのか、と二人は自問することになる。これに関連してポール・アロンとピエール・アレンの次の指摘がある。「ワロニー地方は、1815年にワートルローの戦いがベルギーにとっての勝利だったにしても、1938年に判断を下される同じワートルローの戦いは、「現在のワロニー」にとっては「敗北」としてしか感じられないだろう。[……]感情的に語ることが許されるなら。[……]フランスでは、しかしとりわけワロニーでは、ワートルロー

の戦いの結果を認められないという、何か主観的なものがあるのだ。¹³」

「ワロン人」意識、すなわち「フランスへの親近感」はテキスト内で何度か表明される。ワートルローがはまだフランスの勝利であった世界においてである。

私は激しく感動して聞いていた。それには奇妙な安心感のようなものも混ざっていた。紆余曲折がどうであろうと、芝居の結果はうまく収まることを知っている観客の気分だ。というのも、本能的にはワロン人としての私の親近感は当然フランスの方へ向いていた。もちろん連合軍陣営の中にはいくつかのベルギー人部隊もあったかもしれない。我々の地域は当時オランダに帰属していたし、オランダは連合国軍側だったのだから、なかったはずはない。でも私たちのところでは民衆感情はいつも皇帝の方に向いていた。しかもかなり多くのワロン人が志願してその指揮下で軍務に就いていた。私はハーヴィーの立場に心を打たれ、祖先の責任に関する彼の苦悩を分かち合っていたのだ。(pp.106-107)

そして、反対陣営の勝利になぜ貢献するのだろうか。「3万フランは支払った。さらに3万フランつぎ込もうというのだ。私が言語的・感情的に属しているあの国の勝利を敗北に変えてしまう手助けのために……」(p.155)

ワロン人としてのアイデンティティは、特に言語を通して自覚される。ハーヴィーの実験室のある下宿の管理人リザは、不注意で死なせてしまった娘を想い、後悔から精神を病んでいる。

「私のせいだ、私のせいだ」他にも曖昧だがナミュール訛りのワロン語の単語が聞き取れた。では彼女はフランドル人ではない？ 私は同じ方言で話しかけ、気をしっかり持って父親のことを考えるよう勇気づけた。

(p.128)

一瞬彼女は話そうとした。しかし生きる意欲と共に人間らしい敬意の念が戻っていた。彼女は正装し、髪をきちんと結び上げ、ワロン語ではなくナミュールの引き延ばした抑揚豊かなフランス語で話そうと努めていた。

(p.160)

魂の奥底から出る「ワロン語」＝民族の根源としての言葉、ナミュールの「フランス語」＝教育言語、の違いがリザの精神状態を象徴的に描き出すとともに、「私」は同じ言語を話すことで彼女とつながった気になるのである。

しかし「ここ」はオステンド、すなわち北のオランダ語圏（フランドル地方の「フラマン語」圏ととりあえず言っておこう）である。土地の言葉を話し、その習慣に従うことが、その土地に暮らす人々のアイデンティティないしコミュニティ意識にとっていかに大事なことが、次のエピソードに表されている。

〔ハーヴィーがリザに〕「一階の借家人がこの前私に何を言ったと思います？ そうそう、昨日でした。オステンド中の舗道が復活祭できれいにしてあるのに、うちのところだけ埃だらけのままだと。で、その借家人が言ったんです。《やっぱり彼女はフランドル人じゃないな》ってね。〔……〕あなたがフランドル人でないなんて、金輪際言われないようにしてください！」(pp.161-162)

このように、ナミュール出身であるリザは、オステンドでは「フランドル人」でいることが求められるのである。

それでは、オステンドに集った「私」たちは、いったいどの言語で話してい

たのか？ それについてはどこにも言及がない。ただ、おそらく主にフランス語で会話が行われていたと推測できる。「私」とアクシダンはナミュールでの昔の同級生である。イギリス人ハーヴィーはワーテルローでの祖先の足跡を求めてベルギーに来て、たまたまオステンドに居を構えた。リザは、下宿人や隣人たちとはフラマン語を使っていたかもしれないが、フランス語圏のナミュール出身である。1835年の時点では、公教育はそれ以前のフランス語に代わって、北部フランドル地方ではすでにオランダ語だったはずなので、アクシダンのラテン語の授業はオランダ語で行われていたのだろう。「大事変」後の世界ではアクシダンは同じ中学校の校長になっているので、なおさらだろう。

改めて「オステンド」という場に立ち戻れば、ここにはナミュールやワーテルロー、すなわちフランス的な場が持ち込まれ、さらにイギリスとフランス両陣営の戦いと勝敗の両局面が集結した場でもあり、まさに「あらゆる可能性の中継点」になっているのではないか。「私」ことディウジュは分裂した複数の自意識を持ち、属する世界までも複数に分岐する。作家ティリーはいずれの立場をも否定していない。次章で確認したいのは、ディウジュの二つの分身、アクシダン、そしてハーヴィーも、実はティリーの分身であり、その意味でもこのテキストが作家の思想や信念に基づく示唆の多いものだということである。

Ⅲ 科学 vs 詩、街の支配

オステンドにおいて「歴史の大変革」、すなわち原因-結果の必然性という時間の束縛からの「解放」は、なぜ成し遂げられたのだろうか。それを巡る「私」の思索をまずは引用し、検討していきたい。

操作していた者の手を数秒間離れたせいで、磁波が強度を増したか新しい性質を帯びてしまったのかもしれない、あるいは力学的条件の全く埒外で、私たちの極度に凝縮された情動とリザの嘆きが合わさって一つの流れ

となり——磁気流とでも言おうか、全く知識はないのだが——過去に向って行き、ダグラス大尉に警告を発したのかもしれない。それともこの二つの原因が結合して、レスリー・ハーヴィーの曾祖父は、自分のひ孫がたくさんのプラチナとウイスキーと天才を駆使して創り出した祈りのようなものをついに受け取ったのかもしれない。その祈りはリザの絶望によって効能を発揮したのだ。彼は運命の瞬間に、空からやって来たこの命令を感じ取った。空に視線を向けるのを私たちは見たではないか。彼はいったん断念した偵察をもういちど行い、そして、フリシエルモンの方へ進んでいたプロシア軍大隊が回れ右をしたのに気づいたのだ。(p.204)

ハーヴィーは光の磁化という科学の力で、アクシダンは「詩」という言葉の力で、時間に働きかけようとした。前者はワートルローでの曾祖父の失策の名誉回復のため、後者は因果関係の束縛から自由になるために。目的は異なるが、手段としてワートルロー戦の「決定的瞬間」を再現し、そこに異変をもたらそうとしたのである。

アクシダンは、力学的法則の狂いで生じる奇跡に自分の信念で協力する限り、勝利者であった先祖〔曾祖父、中親衛隊伍長〕を敗者にする手助けをしたのだ。ハーヴィーは一族の名誉と祖国の栄光を同時に救った。彼自身の抵抗がイギリスに奉仕した。それは正気の沙汰でなくてもこの帝国のためになりその運命に適っていた。アクシダンと私は、諸原因の束縛から人間を解放する企ての中で、深い所では我々の祖国であるフランスを打倒すことに手を付けていた。だが結局ワートルローの事実などどうでもいい。〔……〕修復不可能なことはもう存在しない。容赦なき諸原因の長い圧政は終わった！（p.197）

結局ハーヴィーは消え去り、アクシダンは「もう一つの世界」に残った。では「詩」の方が勝ったと言いたいのだろうか？

作家ティリーは、まず詩人である。次に小説家でもある。従って「詩」の力に対して無関心ではなかったことは確かであろう。しかし彼の人生は多様な側面を持っている。シャルルロワで生まれ、すぐにリエージュ（フランス語圏ワロニー地方の主要都市）で育ち、17歳で詩作を始めるが、第一次世界大戦では兄のオスカーと共に兵士としてロシア戦線で戦い、シベリア、太平洋、アメリカ、大西洋を回ってフランスに、そしてリエージュに戻る。法学部を出て数年間弁護士をした後、父の家業を継いで木材貿易の商売をしつつ、やがて詩作を再開、小説も書き始める。つまり、作家自身が「父の跡を継いだ商売」とその失敗を経験し、さらに戦場を経験し、学問や科学にも深い関心を持っていたのである。ハーヴィーの曾祖父ダグラス・ハーヴィーまでもが作家の従軍経験を踏まえた、いわば分身であったとも言えよう。

ティリーはまた、1937年にはエレンスを中心とした〈月曜会宣言 Manifeste du Lundi〉に署名をし、ベルギーのフランス語文学を、地域主義を超え「フランス文学」へとつなげる主張に賛同し、1960年代にはワロニー運動にも関わっていく。しかし注意したいのは、ティリーはフラマン語（オランダ語）も決して排除はせず、「問題としたのは権利であって、「自由」の原理に基づいていたことである。¹⁴」P.アレンは別のところでもこう指摘する。「ティリーはワロニー地方を愛する。かつての公国リエージュを愛するように。彼はフランスもフランス語も愛する。ドイツも愛する。それらは感情である。おそらく彼は、ベルギーへの愛も主張することだろう。〔……〕1920年代以降、諸権利を一つの言語、一つの土地へのものとし、市民のものとしなないのは、許しがたいことだった。¹⁵」テキスト内では、政治や民族や言語の対立を超えた「自由」、それが「詩」すなわち「秩序を乱すもの」の力として描き出されるのだ。それは狂気にもつながるが、まさにリザの狂気の（言語を超えた）叫び、「音の波」、それが時間

の秩序を乱し歴史を転換する決定的瞬間を創り出したのだった。

あらゆる可能性の結末点としての場がオステンドであり、それはまた多層的な「ベルギー」の象徴でもあろう。「ワートルロー」が変わっても、「ベルギー」はなぜか存続したのである。

白い貼り紙があって、そのいちばん上には次の言葉が書かれていた——
《ベルギー王国》。それで私は、ワートルローでの突然の方向転換も我が国が独立する妨げにはならなかったと知った。この世界を私は進んでいた。
(p.203)

だからこの瞬間から、諸情勢は新たな道を取っていた。我々の知らなかった道を。それらの情勢は、以後のほとんどの事実はそのまま存続させることができた。当然、イギリスの勝利も、人間存在のすべてや地球上全体を以後永久に変えはしないのだ。ただ、その相当数が廃されもした。多数の生が異なる道を取っていくのだ。(p.205)

おわりに

「ワートルロー」の運命が変わっても「ベルギー」は創国され、存続する。変わったのは、丘の上の像や競技場の名称といった細部の「徴(しるし)」と、そしてハーヴィーとその実験室の消滅(非存在化)のみ。「私」は今、「この世界」から疎外されて独房にいる。『時間への王手』の物語の主人公は、実はオステンドという場、この都市自体でもあるのではないだろうか。ベルギー象徴派の代表的小説『死都ブリュージュ *Bruges-la-Morte*』(1892)のように。そこではブリュージュの中心広場に聳える鐘楼が、街を彷徨うユエグに常に寄り添い、いやむしる見張り続け、その鐘の音を街じゅうにまき散らしていた。ちょうどオステンドの灯台の三本の光のように。その意味では、ティリーのこのテキストは象徴

主義の流れを確かに受け継いでいる。「ベルギー」の換喩的象徴として「オステンド」は常に存在し、人類を三本の光で包み、そして支配しているのだ。

人々も、その行動も、社会的地位も、言葉も、イメージも、無数の細部は無数の可能性のうちの、偶々選び取られた一つに過ぎない。それは「オステンド」という一つの場の上で展開されるのである。それは多層的なアイデンティティを持つ「ベルギー」のイメージでもあろう。灯台の三本の光線への言及はなぜかテキスト後半では全くなくなる。しかし光線の存在自体が消えたわけではなく物語内世界では存在し続けている。

ところで『時間への王手』のタイトルは、元々は『自由 *Liberté*』だったという。時間の束縛からの解放を高らかに歌い上げる結末を当初は予定していたのだろうか。しかし自由の地オステンドを一見優しく包み込む光が、実は時をリズムカルに刻みながら街全体を監視する支配者であるとすれば、どうだろう。採用された『時間への王手』の「王手」すなわちチェック échec とは、フランス語では「失敗」の意味もある。王手をかけ、詰め、形勢逆転を果たし、そのあと「私」は、過去の光景を見るために横になっていたベッドも、何もかもなくなった部屋の床に倒れ込む。見知らぬ新たな世界でうろたえ、そして独房に閉じ込められる者になる。灯台の三本の光線は「私」にとっての「今」も、そして21世紀の今現在もオステンドで回り続けている。

ティリーは、「自由」を求め、ベルギーの多様な可能性をすべて肯定しようとし、しかしそれでもなお、選び取られた「新たな世界」が完璧に自由な世界ではないことを知っていたのだろう。「私」は閉ざされた壁の中から、さらに別の新たな「ハーヴィー」が現れる未来への希望を語る。それが実現されたあとの世界でも、さらにまた別の世界を求めることになるかもしれない。それこそが「自由」なのだろう。今、この瞬間にも、灯台の三本の光は時を刻み、「オステンド」という一つの場所の、ある特定の人類を包み込み続けている。

注

- 1 森茂太郎「「まつろわぬもの」の影—ベルギー幻想小説私記」『小説幻妖 貳 ベルギー幻想派+幻視の文学 1986』幻想文学出版局、1986年、p.114。
- 2 ロジェ・カイヨワ「妖精物語からSFへ 幻想のイメージ」（東雅夫編著『世界幻想文学大全 幻想文学入門』筑摩書房、2012年 所収）p.314。
- 3 Jean-Baptiste Baronian, *La Littérature fantastique belge : une affaire d'insurgés*, Académie royale de Belgique, Éditions l'Académie en Poche, 2014, p.7.
- 4 M. ティリーへの言及を含め、ベルギーの幻想文学についての概要と特徴を次の拙論で論じている：岩本和子「ベルギーの幻想文学—現実と非現実のはざま」『国際文化学研究』（神戸大学大学院国際文化学研究科紀要）第45号、2015年12月、pp.23-57）。
- 5 マルセル・ティリー（岩本和子訳）「劇中劇」岩本和子・三田順編訳『幻想の垣—ベルギー・フランス語幻想短篇集』松籟社、2016年、pp.255-279。
- 6 Marcel Thiry, *Échec au Temps*, édition originale, Paris, Éditions Nouvelles France, 1945. 参照した版は Marcel Thiry, *Échec au Temps*, Préface de Roger Caillois, Postface de Pascal Durand, coll. Espace Nord, Communauté française de Belgique, 2013. 刊行予定の邦訳はマルセル・ティリー／岩本和子訳『時間への王手^{チェック}』松籟社、2023（予定）。本稿での引用については、原文2013年版のページを本文中に記すことにする。
- 7 Charles Bertin, « Ostende dans l'œuvre de Marcel Thiry » [en ligne] (Communication de Charles Bertin à la séance mensuelle du 13 mars 1982), Bruxelles, Académie royale de langue et de littérature française de Belgique, 1982, pp.1-28 (Disponible sur www.aarllfc.be), p.27.
- 8 Yvan Dusausoit, *Sur les pas des écrivains : de la mer du Nord*, « promenades découvertes », Les Éditions de l'Octogone, 2000, p.43.
- 9 *Ibid.*
- 10 Jean-Paul De Nola, « Eléments d'une éthique du prosateur Marcel Thiry », in *Textyles, revue des lettres belges de langue française, Marcel Thiry prosateur*, Annuel No7 - Novembre 1990, p.94.
- 11 Joël Goffir et Jean Lacroix, *Sur les pas des écrivains : en Brabant*, « promenades découvertes », Les Éditions de l'Octogone, 2000, p.32.
- 12 *Waterloo 1815, Découverte du champ de bataille*, Guide officiel du « Comité de Waterloo », Édition Jourdan, 2016, p.9.
- 13 Paul Aron et Pierre Halen, « Marcel Thiry écrivain politique », *Textyles, op.cit.*, p.82

(note No10).

14 *Ibid.*, p.80 (note No7) .

15 Pierre Halen, « Marcel Thiry : Portrait d'un écrivain en militant », Hans-Joachim Lope (Éd.), *L'Écrivain belge devant l'histoire*, Colloque international organisé à l'Université de Marburg, les 12 et 13 octobre 1990, Peter lang, 1990, p.103.

(いわもと・かずこ フランス語圏文学・芸術文化論)